

氏 名	石 川 格 いし かわ いたる
学位の種類	農 学 博 士
学位記番号	論 農 博 第 690 号
学位授与の日付	昭 和 52 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	史的変遷の過程よりみた庭園の原論的研究

(主 査)
論文調査委員 教授 中 村 一 教授 淺 平 端 教授 半 田 良 一

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は造園の一対象である庭園の歴史的変遷過程を、たんに芸術性という視点だけからではなく、実用的機能性という点をも視野に入れて考察することによって、庭園の性格を原理的に明らかにしようとしたものである。

第1部序論では、従来の庭園史研究が主として芸術史的視点からなされてきたことを批判し、本論の前提として、庭園が人間生活に不可欠な空間領域として発展してきたという認識に立って、その歴史的かつ理論的研究を進める必要を述べている。

第1章では、庭園の語義と定義の変化を検討し、庭園が一定の領域だけに限定されるのではなく、いくつかの領域の複合として把握されることを指摘した。これら領域に関する理論的仮説として、視覚的制限区域、社会的制限地域、建築的影響区域という3種の区域を提示し、これら区域の複合的關係から、庭園の類型化が可能となることを述べている。

第2章では、庭園の機能性について分析し、階級社会と共に成立する庭園が、初期の閉鎖的な性格から、次第に観賞的性格を強め、外部の景観が意識されるようになる史的過程を考察している。

第3章では、西欧と日本の庭園の史的変遷過程を前述の領域の複合關係から説明している。庭園形態は、文化、時代思潮、自然材料、風土などの影響をうけて多様に発達してきたが、これらの歴史的形態が、視界の制限と解放、敷地の広狭、建築物の影響範囲という3つの基本的範ちゅうによって条件づけられ、典型的にとらえられることを述べている。

第4章では、以上の論述の帰結として、庭園類型を建築式と風景式に大別する従来の見解に対して、建築風景式、自然風景式、象徴風景式の基本類型を提案している。

第2部は主として日本庭園の形成過程を通じて、第1部の理論の応用的側面を追究したものである。

第5章では、庭園計画における作者の構想は芸術的意図よりも生活機能への配慮が根底におかれていることを指摘し、したがって、自然的、社会的条件への洞察を抜きにして、庭園をたんなる思想の産物とみ

なす芸術至上主義を批判している。

第6章では、日本庭園の自然材料として、土、石、水、木のもつ特質を歴史的に追究し、特に石の扱いに外来文化とは異なる日本固有の技術と思想性がみられることを明らかにした。

第7章では、日本庭園の芸術性を支えている伝統的管理技術を検討し、これからの庭園の実用的機能の拡大に対応する新しい管理技術の必要について論述している。

論文審査の結果の要旨

庭園という概念は今日では普遍性をもつにいたっているが、庭園を原理的に把握する研究は、これまでのところ芸術としての庭園に重点がおかれたので、包括的な視点を欠いているといえる。

本研究の独創性は、庭園をより包括的にとらえる原理的枠組として、その領域性に着目したところにある。すなわち、庭園の領域性を分析して3つの範ちゅうに類別した上で、これら領域の複合関係によって庭園を典型的に把握するという方法論的仮説を提起している。

これらの領域は、視覚的制限区域、社会的制限地域、建築的影響区域とされる。視覚的制限区域は視覚的に占有される領域であり、視覚性の原理により芸術性と関連のある領域である。社会的制限地域は所有される敷地であり、所有関係及び社会関係によって制限をうける領域である。建築的影響区域は建築物を中心とした生活機能の影響をうける領域であり、実用性に関連をもつ領域である。

これら3つの領域は庭園を設計する過程において、明確に意識されるかされないかは別としても、必ず考慮されねばならない基礎的な範ちゅうであって、これらを論理的に明快に図式化したところに本研究の特色がある。

これら領域の複合関係は庭園の歴史的発展の各段階で類型化することが可能で、この類型化された図式を用いて庭園の歴史的様式を説明することもできる。本研究では西欧と日本の庭園諸様式の解明に対して、この論理的図式の適用が可能であることを論証しようとしている。さらに、この原理の応用的観点から、庭園設計の諸問題について、構想、材料、管理などの多方面から検討を加えている。

庭園様式の解明や庭園設計への応用についての本研究の論証は必ずしも十分とは思われないけれども、この領域性の原理が今後の庭園の原論的研究に新しい発展の契機を与えたことは確実に評価される。

以上のように、本研究は庭園を原理的に把握する方法として領域性の理論を提出したものであって、造園学及び造園設計論の研究に寄与するところが大きい。

よって、本論文は農学博士の学位論文として価値あるものと認める。